

映画時評

新聞連載「シネマ近見」自注(2)

藤田明 映画評論家

前号に続き、伊勢新聞連載の拙稿に関する自注を施しておきたい。2017年夏以降である。

戦争と小津安二郎(8月20日付)

8月なので戦争関連を無視できない世代。青山・久居の訓練時代からシンガポール時代までを扱う。戦後、殊に日中戦争を語らない小津、しかし小津調作品の中にも戦争や死の影は…という結論。小津批判の四方田犬彦を念頭に置いたのだったか。

巨匠ワイダの『残像』(9月3日付)

ここ何年かのワイダ作品には不満が残ったのだが、この遺作は違う。抽象系で実在した画家の、体制とぶつかる生きざまを振り返っていく。『カティンの森』の父との関係などとは異なっていて一定の距離が存在。そこが成功の鍵か。それにしてもスターリン主義にまみれた教条流と表現の自由。ワイダは人類史にしかと刻み込んだと言えよう。

イタリア映画『甘き人生』(9月17日付)

ジャーナリストの回想記。トリノ、ローマ、サラエボ、トリノ

と舞台が移る中で、例えばローマにおける仏教的エピソード。そんな細部も見逃せない。魔女ベルファゴールや母の自死理由、ベッソツツしているものの忘れがたい。

四日市の「シネマ游人」(10月1日付)

4号を主に取り上げたが、前提として大阪の「映画新聞」、熊本の「映画手帳」、埼玉の「映画と私」に触れずにはいられなかった。地方の刊行例が私の映画人生の血肉と無関係ではなかったことを思う。

清水信の映画評(10月15日)

三重県立図書館・文学コーナーの「清水信の軌跡」展に協力する中で展示には間に合わなかったが、氏の個人誌的な4ページの新聞「人間映画」2例に出会う。30号には氏の1957年邦画ベストテンも。1位が『幕末太陽伝』。話題を呼んだ今井正、黒澤明などはテンに入れずという辺りがいい。『地上』『くちづけ』に否定的なのは私と食い違っているが。20号の断片に総目次風記事があり、当時は年に百本見ていた可能性もつかめる。数年後の近代文学賞なかりせば、氏の映画人生は、学生のところ、亀井文夫、木村莊十二に師事して以来の一貫性もありえたらうに、などと妄想に誘われた。

金子安雄・上映会を前に（11月5日付）

三重県出身の映画監督とはよく言われる言葉だが、プロでない出身者に光を、という提起。清水信の同人誌尊重の立場に近い。81年津での上映会、そこに登場した8ミリ、9ミリ半、16ミリの諸作をとにかく記憶しておきたかったわけだ。

2つのドキュメンタリー（11月19日付）

伊勢真一『やさしくなあと』と佐古忠彦『米軍が最も恐れた男：』前者は名古屋の試写へ。奈緒ちゃんも今や40代、長い歩みの中間総括、私の17年度一位と見た。後者はTBSの諸資料が中心。カメジロー一代記で、出来はいい。ニュース映像中心とはいえ、例えば瀬長亀次郎という男の弱い一面も欲しかったし、主席や知事だった屋良・太田などとはどうだったのか（保守系、稲嶺知事などのカメジロー賛はあるのに）なども不十分。記録物ではもう一つ、桑名出身の在日女性監督による『沈黙：』を見逃したのは気にかかっている。

金子安雄作品を見る（12月3日付）

11月23日の津における上映会報告。津市が広報に載せてくれなかったのに満席だった。やっとDVD化できた10作品の評、そして81年上映会のドキュメント映像を提供された伊勢の長尾正男さんへの謝辞をいうこと。

2017年、県内の動き（12月17日付）

自分とかかわりのあった催しを主に取り上げたが、桑名ロケの

『お嬢さん』批判や10月の敏八上映会なども含む。登重樹氏の小津本、吉村氏の赤狩り本でしめくくった。後者の力業については「津市民文化」12号でとりあげた。

スペインの新作、フランスの旧作（2018年1月7日）

サウラの『J・ビヨンド・フラメンコ』とメルヴィルの『ある道化師の24時間』『海の沈黙』。前者の原題は『ホタ』、それでは売れないと見ての邦題はひっかかる。ごひいき監督の作としてはナレーションを廃した進め方で、次から次へと歌や踊りの連続。やや評価しづらい面も。晩年の一徹さと解するか。後者の『海：』は再見、ちくま版高校国語教科書で私など出会った原作のことも思い出させてくれた。

「清読 小津安二郎」を読む。（1月21日付）

北海道の中澤千磨夫氏2冊目の小津論。全国小津ネットのレターに書評を寄せたが、悪文の感を自ら抱いて、簡潔にもう一つしるしたくなった。戦争重視の点で共感、殊に近作の「宗方姉妹」論は出色。氏ならではの、だった。数ある小津本の中で推せるのは前田英樹本とこれ、ということになる（紙面に出たころ、流感に取りつかれるに至った。しかしその前に届いた林久登氏「ポーランド」はうれしい。私などには書けない逸品であった）。